裏切りを予告するイエス

ヨハネ福音書13:21-30

【新改訳 2017】

13:21 イエスは、これらのことを話されたとき、心が騒いだ。そして証しされた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります。」
13:22 弟子たちは、だれのことを言われたのか分からず当惑し、互いに顔を見合わせていた。
13:23 弟子の一人がイエスの胸のところで横になっていた。イエスが愛しておられた弟子である。
13:24 そこで、シモン・ペテロは彼に、だれのことを言われたのか尋ねるように合図した。
13:25 その弟子はイエスの胸元に寄りかかったまま、イエスに言った。「主よ、それはだれのことですか。」
13:26 イエスは答えられた。「わたしがパン切れを浸して与える者が、その人です。」それからイエスはパン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダに与えられた。
13:27 ユダがパン切れを受け取ると、そのとき、サタンが彼に入った。すると、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、すぐしなさい。」
13:28 席に着いていた者で、なぜイエスがユダにそう言われたのか、分かった者はだれもいなかった。
13:29 ある者たちは、ユダが金入れを持っていたので、「祭りのために必要な物を買いなさい」とか、貧しい人々に何か施しをするようにとか、イエスが言われたのだと思っていた。
13:30 ユダはパン切れを受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。

【祈りながら考えよう】

（１）「悪魔はユダの心にイエスを裏切ろうという思いを入れていた」（13:2）と「サタンが彼に入った」（13:27）とはどう違いますか。

（２）キリスト教の恒久的原則である悪魔を対処する方法を御言葉（ヤコブ4:7）から説明してください。

（３）27節の「あなたがしようとしていることを、すぐしなさい」とは、どういう意味ですか。

【解　説】

（１）心が騒いだ

主が弟子たちの足を洗われてから、元の席に戻られて、夕食を続けておられた時、主はご自分の方からはっきりとこう言われた。「**まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります。**」

主は、いつも重要なことを語られる時、必ずその冒頭に、「**まことに、まことに、あなたがたに言います**」と言われた。この時も主は重大なことを語ろうとしておられたことがよく分かる。

この時には、「**心が騒いだ**」（ギ ταράσσω／タラソウ／英 troubled in spirit）とヨハネは記している。これと同じ言葉は、ラザロが死んでしまって、マリアやそこにいたユダヤ人たちが泣いているのをご覧になり、主が「**心を騒がせて**」（**ヨハネ11:33**）と記されている時にも使われている。この言葉は、「悩ます」とか「心を動揺させる」という意味である。

主が十字架の苦しみを見据えて、「**今わたしの心は騒いでいる**」（**ヨハネ11:27**）と言われた時にも、この言葉が使われている。主の御心の苦しみを表している。

三年余り主のみそばで愛の薫陶を受けた者の中に、主を裏切る者がいるのだということは、考えただけでも、主にとってそれは、耐えがたいことであったに違いない。裏切られてから知っても、裏切りによって受ける傷は決して浅いものではないが、裏切る者が誰であるかをご存知で、最後の最後まで愛し通された主の御心はどんなに苦しかったことであろう。ユダを見るたびに、傷口がこすられるような痛みを、主は感じられたに違いない。

（２）イエスが愛しておられた弟子

弟子の一人がイエスの胸のところで横になっていた。イエスが愛しておられた弟子である。そこで、シモン・ペテロは彼に、だれのことを言われたのか尋ねるように合図した。その弟子はイエスの胸元に寄りかかったまま、イエスに言った。「主よ、それはだれのことですか。」（23-25節）

当時は、食事の際、まっすぐ座るのではなく、低い寝椅子に横になった。「**イエスが愛しておられた弟子**」というのは、この福音書の著者ヨハネである。ヨハネは自分の名前は明かしていないが、自分が救い主の心の中で特別な愛情の位置を占めているという事実をためらうことなく示している。主は弟子たちすべてを愛しておられた。しかし、ヨハネは、主と特別に親密であるという気持ちを持っていたのである。

そこでペテロは、声を出さずに身振りで尋ねた。うなずく仕草をして、ペテロはその裏切り者の名前を突き止めるようにヨハネに頼んだのかもしれない。

イエスの胸に寄りかかりながら、ヨハネは、運命を決する質問を小声で尋ねた。そしてその返答も、おそらく小声であったろう。

（３）わたしがパン切れを浸して与える者が、その人です

イエスは答えられた。「わたしがパン切れを浸して与える者が、その人です。」それからイエスはパン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダに与えられた。（26節）

イエスは、「**わたしがパン切れを浸して与える者が、その人です。**」と答えられた。当時、食事における主人役は賓客（ひんかく）（大事な客人）にパンを与える習慣があった、と言われる。ユダを賓客として扱うことによって、主はご自身の恵みと愛によってユダを悔い改めに導こうとされたのだ。

主は最後の最後まで、他の弟子たちには分からないようにして、イスカリオテのユダをみんなの前であばき立てるようなことをせず、しかも本人には分かる方法で、悔い改めることを迫る愛の訴えをし続けておられたことが分かる。

（４）そのとき、サタンが彼に入った

ユダがパン切れを受け取ると、そのとき、サタンが彼に入った。すると、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、すぐしなさい。」（27節）

この章の初めに、悪魔は「**ユダの心に、イエスを裏切ろうという思いを入れていた**」（**ヨハネ13:2**）と告げられていた。ここでは、悪魔が「**彼に入った**」と告げられている。初めに悪魔は戸を叩き、中に入れてもらえないかと願う。そして、ひとたび入れてもらえたならば、彼は独裁者のように、内なる人の全体を完全に占有し、支配する。

悪魔は今も地をゆき巡り、食い尽くすべき者を探し求めている。唯一の安全策は、最初に彼に抵抗し、最初に言い寄られた時に耳を貸さないことである。悪魔は強いけれども、もし私たちが天におられるいっそう強い方に叫び、その方の指定された恵みの手段を用いるならば、悪魔は私たちをそこなう力はない。

次のことは、キリスト教の恒久的原則であり、いつも真実であると認められることである。すなわち、「**神に従い、悪魔に対抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります**」（**ヤコブ4:7**）ということである。

サタンに悪い思いの種まきをさせておく者は、やがて自分の心に悪習慣という実りを見ることになる。

主は、「**あなたがしようとしていることを、すぐしなさい**」と言われた。主が彼を見捨てられたから、彼が悪魔の道を選んだのではない。彼が主の愛の訴えを拒んだがために、主は彼を見捨てられたのだ。

主は、私たちに理を尽くし、悔い改めなければ危険であること、そのままでは最後の裁きに遭わなければならないことを、手を変え品を変え、繰り返し繰り返し語られる。ユダの場合のように直接ではなく、聖書を通し、あるいは集会や兄弟姉妹を通して語りかけて下さる。このように悔い改めのチャンスを提供して下さる。しかし、それを永久になさるわけではない。

カルヴァンは上記の御言葉を次のように説明している。「これまでイエスは、ユダを引き戻そうと様々な方法で努めてみたが、全く無駄であった。今やイエスは、あきらめきった者のようにユダに語りかけておられる。『破滅へと進むがよい。あなたは破滅に向かって進もうと心に決めてしまったのだから』と。こうなさることによって、イエスは審判者の職務を行っておられるのである。その審判者は、進んで人を滅びに追いやってから死刑を言い渡すのではなく、自らの過ちによって、すでに自分自身を滅ぼしてしまった人々に対して、死刑を言い渡すのである。」

（５）分かった者はだれもいなかった

席に着いていた者で、なぜイエスがユダにそう言われたのか、分かった者はだれもいなかった。ある者たちは、ユダが金入れを持っていたので、「祭りのために必要な物を買いなさい」とか、貧しい人々に何か施しをするようにとか、イエスが言われたのだと思っていた。（28-29節）

この節から確認できるように、パンに関するイエスとユダの先ほどの会話は、他の弟子たちには聞こえていなかった。彼らにはまだ、ユダが今にも主を裏切ろうとしているということが分かってはいなかった。

中には、イエスはただ単に、祭りのためにすぐに出かけて何かを買って来るように命じられたのだ、とか、ユダが会計係であったことから、救い主であられる主が、貧しい人々に施しをしてくるように指示されたのだ、とか思う者もいた。

（６）時は夜であった

ユダはパン切れを受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。（30節）

ユダは自分の良心によって断罪されても、もはや主の群れのうちにあえて座っていることができなかった。他の誰にも分からなかったとしても、とにかく彼には主の言おうとしておられることが分かった。

彼は自分が見破られ、自分のことが露見していることを感じた。そこで、まさに恥ずかしさのために、彼は立ち上がり、出て行ったのである。「**時は夜であった**」とヨハネは印象的なことばで結んでいる。